

氏名	飯島香織
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第169号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉オペラ《春琴抄》 〈論文〉オペラ《春琴抄》の歌唱研究
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 准教授（音楽学部） 佐々木典子
（副査）	〃 教授（〃） 寺谷千枝子
（〃）	〃 〃（〃） 永井和子
（〃）	〃 准教授（〃） 植村幸生
（〃）	昭和音楽大学 〃（舞台芸術センター） 石田麻子

（論文内容の要旨）

オペラの日本語は聞き取りづらいと常々言われてきた。日本語の歌唱は日本人であっても大変難しく感じる。体系づけられたメソッドが確立されているわけではなく、ただ西洋発声で日本語を歌い、テクニックや表現はそれぞれの歌手の力量に委ねられている部分が多い。これまで多くの日本人がベルカント唱法と日本語の両立に取り組んでおり、それなりに成果も上がっているが、必ずしも十分とはいえない。

本来発声とは各言語と不可分の関係であることから、日本語歌唱を考えると、西洋言語から派生したメロディではなく、日本語から派生したメロディを取り上げる必要がある。本論文では、オペラ《春琴抄》を通して日本語歌唱を考察することを目的とする。この作品は、地歌・箏曲に音楽的にもそしてドラマの内容的にも基づいており、その中で歌われるメロディも地歌から派生させたようなものが用いられていることから、大いに研究する余地があり、日本語歌唱・日本語表現の可能性を内包しているものと思われる。

歌手がこの曲を具現化するにはどのように取り組めばよいのだろうか。日本語の言葉の明瞭さに加えて、地歌の抑揚や歌い方、その表現方法を理解する必要がある。

まず、明瞭な日本語歌唱を考察するために、音節単位に着目してその問題点や解決策を見ていく。筆者が歌いにくいと感じる点、聞こえづらいと指摘を受けた点において、その発音を西洋と日本の発音法、調音の違いから分析する。これらについて実践的に克服している例をあげ、そこに筆者の体感したことを照らし合わせながら、どのようにその難点を克服できるか導き出す。

次に、地歌とはどのように歌われるものなのかを知るために、〈雪〉〈黒髪〉など《春琴抄》の中で歌われる地歌の歌い方を分析する。本来ならば箏曲の演奏者によっていわゆる地声の発声で歌われる曲である。オペラの中では西洋発声で歌うこととなるため、地歌の表現をどのように西洋発声の上で取り入れられるかを検討する。検討にあたり筆者は実際に地歌を習い、その歌い直しなどを学んだ。

最後に、アリアや劇中に西洋発声で歌われる地歌のフレーズに着目し、地歌の分析から、そのメロディがどのように伝統音楽の影響を受けているか、地歌からどう派生させられたのかを考察し、西洋発声でどのように情緒的に表現できるか検討する。箏曲の先生にご指摘いただいたこと、筆者が実感したこと、楽器から得たインスピレーション（押し手、引き色）なども踏まえて論じた。

その結果、様々な角度から日本語歌唱の表現の可能性を見いだすことができた。

音節の単位で日本語の特徴を調音法などから捉えて西洋言語と比較し、どのような日本語の発音がベルカントと共存しにくいのかを理論的に考察し、ある程度子音別による日本語歌唱の陥りやすい問題と解決法を体系づけることができた。これらの日本語の特徴や問題点を認識した上で、西洋言語の調音特性を取り入れて効率的で明瞭な日本語を心がける方法を提示した。

こうして得られた音素材を用いて、地歌の歌い回し、表現、そして邦楽器から得られるインスピレーションなどを通して、どのように地歌に潜む情緒を表現することができるかを探った。地歌の先生から口伝で教わることで、旋律の中で重きを置くところ、抜くところ、揺らすところ、張るところ、表と裏の概念など、旋律のフレージングを理解することができた。こういった歌い回しの表現は言葉と見事に寄り添っており、旋律の中の抑揚、音の運び、フレージングは言葉に陰影をもたらしている。また、言葉のもつ世界観も、抑揚、音の運び、フレージングに影響を与えて地歌の表現が成り立っているのだと感じた。これこそが筆者が地歌を習う前に漠然と日本の伝統音楽に感じていた横に流れる感じ、静寂さ、情緒などと表現されるものであるとわかった。

このように、日本語の問題点や特徴を知り、地歌を学び分析し、どこにその日本の情緒が潜んでいるのかを理解したうえで、その方法を借りてベルカント発声でどのように表現し歌うことができるかということを実践することができた。

日本語の特徴をとらえた上で、地歌から表現方法を学ぶことで、これまでとははるかに違う次元の、説得力の持った表現が可能になり、結果的に日本語も明瞭にかつ美しく情緒をともなって聞こえるのだと思う。

このように単に日本語が聞こえるだけではなく、説得力を持つ日本語表現をともなってこそ、日本語と西洋歌唱が両立したと言えるのではないだろうか。つまり日本語を西洋発声で歌う場合には、日本語に固有の調音の特徴を熟知し、西洋言語の効率的な発音方法などを取り入れ補う。そして地歌に表われているような歌い回し、抑揚など、音の背後に潜む地歌の世界観を伴ってこそ、説得力のある日本語歌唱表現が可能となるのではないだろうか。

(総合審査結果の要旨)

本学位申請論文は、「オペラ“春琴抄”の歌唱研究」という題目で、西洋音楽の発声による日本語歌唱の研究である。

申請者は、第一回演奏会に、“鶴”(三木稔 作曲)、第二回演奏会に、“夕鶴”(團伊玖磨 作曲)と既に、西洋音楽の発声で、いかに日本語のテキストを明瞭にそして音楽的に演奏できるか、試みている。今回の最終審査演奏のために取り上げた“春琴抄”は、“鶴”における歌唱と語りや“夕鶴”と違い、地歌のメロディーとテキスト、また節回しが入っているため、本格的な日本伝統音楽の研究がなされている。

論文は、演奏者としての視点で書かれているため、言葉に対する説明の不足や、第三章における、多少個人的な意見の偏りはみられるが、申請者の日本オペラにたいする意欲は、大変感じられる。

演奏も、第一回目、第二回目もそうであったが、小編成にアレンジされた、三味線、琴、尺八、ピアノによるオーケストラでまとめられ、地歌、地唄舞も習得するまでにはいたっていないが、積極的にオペラの演技として取り入れ、規模は大きくないが、総合芸術として、レベルの高い、内容の充実した公演となった。

申請者が続けて来た研究と実践が一致した舞台と論文であるといえる。学位授与に値いすると判断され合格とする。